今月のゲストは馬主の廣崎利洋さん。菊花賞でアスクビクターモアが勝利し、自身5つめのGIタイトルを獲得した。菊花賞制覇を振り返ってもらうとともに、競馬に対する思いを語ってもらった。

（この対談は11月7日に収録しました）

杉本清の競馬談義 433

石山勝敏＝撮影
photograph by Katsutoshi Ishiyama
編集部＝構成
construction by Editorial Staff

レースを見たと言うより、レースを感じたというような…

杉本　アスクビクターモアの菊花賞優勝、おめでとうございます。

廣崎　ありがとうございます。

杉本　ゴールの瞬間はどうでしたか。

廣崎　夢中ですよね。あまり認識がなくて、なんとなく過ぎ去ってしまったという感じです。テンション高かったでしょうね、血圧が上がったと思います。

杉本　ハナ差のゴールだったので、どんなお気持ちで見ていたのかなと思いまして。

廣崎　いやあ、レースを見たと言うより、レースを感じたというような…。

杉本　感じた？

廣崎　はい。競馬って、そういうものじゃないでしょうかね。じーっと見て、冷静に見られる人はいるんでしょうか。杉本さんが昔しゃべっておられたのを見ていても、夢中ですものね。

杉本　夢中でした。

廣崎　レースのなかに入っちゃいますよね。

杉本　皆さんは、仕事として実況してる方が多いと思うんですけど、ぼくは違って…。

廣崎　だから、映画を見ているような、ストーリーがありますよね。で、我々は観客ですから、入っていくんですよね。ヒデコトブキがきた、トウメイがきた、トウメイかヒデコトブキかって。あの実況が頭から離れないですよ、ぼくは。

杉本　あれはぼくの最初の桜花賞の実況ですよ。昭和44年です。

廣崎　ぼくが大学を出るときで、あの桜花賞が競馬にご縁ができたきっかけなんです。トウメイとヒデコトブキの競り合いと、杉本さんの声が離れない。

杉本　そうですか（笑）。それで菊花賞ですが、スタートしてすぐに二番手でしたね。一周めはわりと冷静にご覧になっていたんじゃないですか。

廣崎　そうですね。一周めは頑張ってほしいなあという、そういうもんですね。でも、最後は夢中で、全部忘れちゃった（笑）。

杉本　そうですか（笑）。でも、勝ったのはわかったんじゃないですか。

廣崎　いや、わからなかったですよ。4コーナーの真ん中ぐらいにきましたら、そこからはわけがわからなくなった。

杉本　あそこでスパートしたのが勝負所だったんじゃないですか。

廣崎　そうだったんでしょけど、ほんと、なにも覚えていない。もう勝ったか負けたかは興味じゃないんですよ。行けーって。で、あとで聞いたら、危なかったって（笑）。でも、仮に負けていたとしても、ぼくはもう十分でしたよ。

杉本　ぼくはテレビのゲストだったので、モニターをとおして見てましたけど、4コーナー手前で、勝負にでたなと。

廣崎　あんな4コーナーのまわり方はなかなかできないですよね、一瞬にして行きましたよね。

杉本　あれは作戦だったんでしょうか。

廣崎　田辺くんにあとで聞いたら、なにも考えてなかったと。とにかく行ったと。

杉本　そうですか。その前のセントライト記念では、一回並ばれて、引き離して、ゴール前でもう一回相手が伸びて、きわどい差で2着。あの2着が菊花賞で活きてきたのかなと思いましたが。

廣崎　そうかもしれないですが、神の御加護だと思います。馬の力、騎手の能力、そのほかの要素があるんでしょうが、ぼくは、競馬の神様の御加護だと思っています（笑）。

杉本　競馬の神様（笑）。

廣崎　だと思います。もう、それしかないと思います。

杉本　オーナー歴は何年になりましたか。

廣崎　35年になります。

杉本　最初にお会いしたのは、京都競馬場のパーティーでしたね。細川益男さんが関西の財界のトップの人たちを招待されて。

廣崎　そうです。それで、細川さんのマチカネコイノボリが勝って、招待を受けた人たちがターフの上に並んでね。あんなの普通できないじゃないですか。その当時は、いろんな配慮ができたんでしょうね。

杉本　そのときに廣崎さんを紹介していただいたんです。

廣崎　そうでしたね。伊藤雄二さんが「この人が杉本さん」だと。そのときに、伊藤さんが「馬、よろしおますよ」って言うので、「じゃ、やりますか」って。それで、馬主になろうって、やり出した。だから、すべては杉本さんの声で始まった（笑）。

杉本　そうですか（笑）。

廣崎　でも、ぼくの地元の阪神で、菊花賞と桜花賞（レッツゴードンキ）に勝つんですから、こんなのあり得ないですよ。今回のレコードタイムが3分2秒4で、会社の住所が三番町2の4、ぼくは2月4日生まれなんです。こんな偶然がね（笑）。

杉本　出来すぎですね（笑）。

廣崎　それで、こうして杉本さんと対談の機会を設けていただいて、私と女房は今年が金婚式なんです。もう、競馬の神様が、35年に一回、幸せ感を与えてくれたような。

杉本　ご褒美ですよ、やっぱり。

廣崎　これ以上、欲はなにもないです。

杉本　これが癖になることは（笑）。

廣崎　いやいや。もうないです。35年で、競馬の難しさというのはわかってますから。ぼくが最初に桜花賞を勝ったときに、メイショウの松本好雄さんから「廣崎さんね、ぼくが初めてGI取ったのは28年めのときだよ」って言われたんですよ。尊敬する松本さんから。すごく印象に残ってますね。そのとき、ぼくも28年めだったんですよ。

不思議な感覚のなかで勝っているんだと思います

杉本　レッツゴードンキのときと今回では、気持ちも違ったんじゃないかなと。

廣崎　今回は興奮していました。桜花賞のときは一般席のところで立っていて、なぜか、おー、来た、おー、勝ったって。そういう無心の喜びですね。今回は勝ったかどうかわからなかったんですけど、ゴールに入った途端、エレベーターのところにいましたから。2着かもわからないのに、とにかく良かったと。馬を見に行こうと。

杉本　ああ、なるほど。

廣崎　そしたら、勝ってたんですよね。

杉本　ぼくは画面で見ていて内だと思いましたけど、現場でご覧になっていて、もう大騒ぎになっていたんじゃないですか。

廣崎　（小声で）見てません。4コーナーをまわって、ワーッとなって、なんだかんだ言って。「写真判定！」という放送をエレベーターの中で聴いているんです。だから、勝ったかどうかは（笑）。

杉本　へえー（笑）。それで、とにかく、帰ってくる馬を見に行こうと。

廣崎　そう。馬を見に行こうと。勝手に行ってるんですよ、体が。応援の人はいっぱいいたんですけど、皆を無視して、エレベーターに乗って。

馬主

廣崎利洋

ひろさき・としひろ／1947（昭和22）年生まれ。兵庫県出身。ASK GROUP HOLDINGS株式会社代表取締役。88年に中央競馬の馬主資格を取得。主な所有馬にレッツゴードンキ（15年桜花賞）、ストレイトガール（15・16年ヴィクトリアマイル、15年スプリンターズS）などがいる。アスクビクターモアが勝利した菊花賞でGI5勝め。ASK STUD（北海道平取町）で競走馬の生産も手がけており、ボンボヤージは自家生産馬。

杉本　口取り写真には何人も並んでおられましたけど。

廣崎　ターフに出たのは、ぼくが最初でしたね。それで、カメラマンの人とかが集まっているときに、まだ誰もいない。

杉本　先にひとりだけ馬場に出て。

廣崎　なんか、不思議ですね。たぶん、いままですごい馬をお持ちの方は、おなじような経験をしていると思うんです。勝とうと思って勝っている人はもちろんご立派なんですが、ぼくみたいにそうでない人は不思議な感覚のなかで勝っているんだと思いますね。自分が走ってるんじゃないですから。勝った人にしかわからない、不思議な、なんか宇宙学のようなものがある気がしますね。

杉本　それで、ひきあげてきた馬はどんな感じでしたか。

廣崎　いやあ、良かったですよねえ。すごかった。血管が浮いてましたね。

杉本　それを見ると、感動しますよね。

廣崎　感動しました。こういう経験はないですねえ。レッツゴードンキのときとはまったく違いましたね。

杉本　それはなんでですかね。

廣崎　たぶん、レッツゴードンキのときは、ストレイトガールが同じ時期に走ってくれて、もう慣れてきますよね、何度もGIに出てるわけですから。それが終わって、5年ぐらいはなにもなくて、急に、ビクターモアがこうして出てくれて、前よりも緊張感がありますね。経験を持った上での期待ですから。負けたときはどうしたらいいんだろうとか、色々考えてね。

ヨーロッパ血統に気持ちがいっていました

杉本　この馬はセレクトセールで買われたわけですが、決めた理由というのは。

廣崎　神の御加護で、勝手に手を挙げたのか(笑)。ただ、この馬にはこだわりました。追えるところまで行こうと。母の父が凱旋門賞馬のレインボウクエストで、ヨーロッパ血統じゃないですか。ぼくは、ストレイトガールとレッツゴードンキをイギリスのナショナルスタッドに預けていましたから、ヨーロッパ血統に気持ちがいっていましたね。それと、ディープインパクト産駒も残り少ないですから、これは買っておかないと、と思いまして。

杉本　なるほど。

廣崎　実際に馬を見ても、感じるものがありましたね。それで、横に藤原英昭先生がいまして「いい馬だ、いい馬だ」って言うので(笑)。

杉本　藤原調教師としては、買ってもらって、自分がやりたかったんでしょうね(笑)。

廣崎　藤原先生はこの馬を決めたという立場ですから、やるつもりだったんです。あのとき、ドゥラメンテ産駒の注目馬が出てまして、それを先に買ったんです。同じような金額でしたが、田村康仁先生が「これはいい、最高だ」と。それで、あとでテントに戻って、藤原先生に「替えたらどう」って言ったら(笑)。

杉本　交換されたんですか(笑)。それで田村調教師のところにビクターモアが行ったんですか。おもしろいですね。

廣崎　運と縁はすべてに優先すると言いますか。そのドゥラメンテ産駒のアスクドゥラメンテも2戦1勝ですから、これから出てくると思いますよ。たぶん、ダートではすごいと思います。

杉本　藤原調教師はビクターモアをどう思われているんですかね。

廣崎　あの人はすごいですよ。笑ってますよ(笑)。悔しそうでもない。伊藤雄二先生の紹介ですから、おおらかですよ。

杉本　腕の立つ調教師ですよね。

廣崎　そうですよ。でも、田村先生に預かっていただけたことは良かったですよ。「あんないい馬はいない。世界一だ」と、馬主以上に思い入れがある(笑)。田村先生も最高の出会いだったんじゃないですか。

杉本　競馬の神様も認めた。

廣崎　ぼくも、運が良かったです。

杉本　馬主になるきっかけをつくってくれた細川さんもマチカネフクキタルで菊花賞に勝ちましたが、ご健在でしたら、今回の菊花賞は喜ばれたと思いますよ。

廣崎　そうですねえ。あの当時、メイショウの松本さんとか、京都と阪神で、旦那様が皆でわいわいと楽しんでおられた。その影響をぼくらも受けています。事業をしていた人間が、なにか誇りを持つのに、競馬は最高の栄誉です。

杉本　やっぱり。最高の栄誉ですか。

廣崎　最高の栄誉です。それはもう、ハッピーですよ、ハッピーすぎますよ。

杉本　だから、負けたときの、廣崎さんの気持ちの持ち方がすばらしいなと思うのは、嫉妬心とか、そういうのをいっさい持たれないというか、あなたのほうが強かったですね、と言って、相手を称える。

廣崎　それは当たり前です。エアの冠名の吉原毎文(つねふみ)さんは、伊藤正徳さんや雄二さんの関係で、同じ厩舎に預けることが多かったんです。吉原さんはお父さん(吉原貞敏氏)のときからやられている大先輩で、ぼくの馬が走ると必ず来て「あれ、いい馬だよ」って、他人の馬を誉めてくれるんですよね。ああ、いいことだなと思いましたね。

杉本　それを廣崎さんご自身も。

廣崎　影響を受けています。馬主は、一緒に馬が走っている人がたくさんいるなかで、自分がどういう仕草をするかというのは大事だと思います。

馬の力、騎手の能力、
そのほかの要素があるんでしょうが、
ぼくは、競馬の神様の
御加護だと思っています(笑)。
競馬の神様が、35年に一回、
幸せ感を与えてくれたような。

馬が走れる状態であったら、走らせるべきだと思います

杉本　先ほどお話に出ましたが、牝馬をヨーロッパに持っていってると。

廣崎　そうですね。去年はレッツゴードンキがガリレオの仔を産みました。ストレイトガールはフランケルを付けて、アスクビートルズという名前の2歳馬が今年デビューすると思います。

杉本　競馬も生産まで含めて世界を舞台にするようになってきていますね。2頭はまだイギリスにいるんですか。

廣崎　2頭とも日本に帰ってきています。ストレイトガールの最初の仔もフランケル産駒で、競走馬にはなれなかったんですが種牡馬にしました。アスクピーターパンという名前で、今年10頭種付けしています。

杉本　そうですか。それと、もう1頭。アスクワイルドモアも菊花賞に出てましたけど、これも京都新聞杯に勝っていて、期待がかかっている馬でしょ。

廣崎　昔、吉原さんのお父さんの馬で、ワイルドモア(69年皐月賞)という強い馬がいましたよね。あれにあやかった名前ですから、期待してますが、杉本さん、期待は毒ですから。期待して、あまり当たったことがない(笑)。

杉本　たしかに、馬券もそうです(笑)。

廣崎　期待しなかったときが当たるわけです。だから、夢は持ちつづけても、あまり期待をしたら、馬がかわいそうです。

杉本　ああ、なるほどね。

廣崎　ファンタジストという馬がいましたが、重賞のとき、レース中に…、かわいそうにね。あれは期待しましたよ。

杉本　あの馬はクラシック路線に乗って…。

廣崎　ほんとに、良かったんです。それで今年、あの馬の妹のボンボヤージが16番人気で北九州記念に勝った。

杉本　時々、廣崎さんの馬にはそういうことをされるので(笑)。それで、ビクターモアはこのあと有馬記念ですか。得意の中山ということで。

廣崎　そうです。中山は得意ですね。田村先生は「中山のビクターモア」と言うぐらい中山が大好きなんですよね。

杉本　そうすると、有馬記念でまた楽しめると。馬の状態にもよるでしょうが。

廣崎　馬次第でしょう。競走馬ですから、走れるときに走らせてあげたら一番いいと思いますね。人間があまり策を入れないほうがいいと思います。どれが得だとか損だとかも大事ですが、やっぱり、馬が走れる状態であったら、走らせるべきだと思います。ぼくはそういう考えですね。ただし、体調が悪かったりしたら、やめるべきです。

杉本　廣崎さんの馬は、けっこう長い期間走ってますよね。ネヴァブションも…。

廣崎　10歳まで行きましたね。河内洋さんのところのオーマイガイは9歳で走っています。ストレイトガールもレッツゴードンキも7歳。競走馬として走れるときに走らせてあげたい。走る気がなかったら、早くやめさせるべきだと。長く走っている馬が目立ちますが、早く終わっているのもいっぱいいます。

杉本　菊花賞ではすごい記録もつくりましたね。ずっと続いていたディープインパクト産駒のクラシック勝ちを守ったという。

廣崎　そうですねえ。これは自分個人の立場で考えないほうがいいですね。サンデーサイレンス、ディープインパクト、その血を引き継ぐとなったら、もう個人の所有物じゃないと思います。日本の競馬界として残していかなくちゃいけない。そういう話になったら、耳を傾けるべきでしょうね。

杉本　ああ、なるほどね。

廣崎　この馬はたまたまセールでぼくが買っただけのことですから。もうディープインパクトの仔も少ないですし、それにレインボウクエストの血がはいった血統となれば、悲願の凱旋門賞に行って、なにかがあるかもわからない。だから、来年か、再来年か、行ったらいいと思いますね。

杉本　その夢は実現してくださいよ。

廣崎　吉田松陰先生の言葉に「夢なき者に理想なし。理想なき者に計画なし。計画なき者に実行なし。実行なき者に成功なし」というのがありますが、夢は馬をつくった人たちが考えてくれればいいわけで、ぼくは理想を求めます。ビクターモアが種牡馬になったときに、自分の繁殖牝馬に付けて楽しむのがぼくの理想の道かな。ストレイトガール、レッツゴードンキに、今走っているプリティーチャンスとか10頭ぐらいいますから、全部に付けてあげたいなと。

杉本　そうしたらオーナー生活はこれから益々楽しみになりますね。

廣崎　ここまできたら、こういう馬主の生活もあるんだというのをきちんとして、マナー良くやって行きたいと思いますね。

杉本　マナー良くというのが大事ですね。

廣崎　ゴルフと一緒ですね。いくらいいプレイヤーでも、マナーを守らないとね。私の父の言葉に「受けた恩は石に刻め」というのがありまして、それが自分の人生の指針なんです。杉本清さん、伊藤雄二さん、河内洋さん……。ぼくの最初の馬アスクヒーローは河内さんが乗って勝ってもらって、いまだにお付き合いしています。

杉本　人生100年時代と言われていますが、廣崎さんはいつも、自分は110歳、115歳まで生きる、とおっしゃってますから。長く馬主を続けてください。

廣崎　ありがたいことです。杉本さんも、ぜひ120歳まで頑張ってください。杉本さんの「トウメイ、ヒデコトブキ」の声で、ぼくは馬に入ったんですから。

杉本　いやあ、そう言っていただいたら、ぼくも頑張らないと(笑)。

H.Yamanaka

杉本清の競馬談義

Toshihiro Hirosaki × Kiyoshi Sugimoto

菊花賞が阪神競馬場で行われたのは今年も含め3度のみ。阪神競馬場に近い西宮で生まれ育った廣崎オーナーにとって、より感慨深い勝利になったという